寺報 善巧（ぜん ぎょう）　第26号　昭和58年1月1日

寺ごよみ　一月

一日　元旦会　年頭参り
三日　日曜学校カルタ会
　雪ん子けいこ初め
三日〜四日　栗虫・御助成
六日〜七日　栗虫・報恩講

御正忌報恩講

一三日　後一時　逮夜
一四日　後一時　逮夜
一五日　前十時　子供の集い
　前十一時半　お講・下村
　後一時　逮夜
　後七時半　初夜　御伝鈔
　お経会の集い
一六日　前七時　晨朝
　前十一時　お講
　後一時　お満座

◇御正忌（おしっちゃ）は親鸞聖人の祥月御命日の法座です。おさそい合わせお参り下さい。

寺報 善巧（ゼン ケウ）

発行
〒938　富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山　善巧寺
☎宇奈月(07656)(5)−0055

賀正

昨年は善巧寺の三大法要にご協力いただき、ありがとうございました。
今年もまた、おさそい合わせお参り下さいませ。

白雪山　善巧寺
三法要実行委員会

絢爛！――秋の大法要の内陣荘厳

善巧寺のお正月

明けましてお目出度う。本年も相変らずよろしくお願い致します。

「善巧寺のお正月」と題して随筆風に綴って見ます。お正月の和やかな気分で、読んで頂きます。

あれは私が未だ中学生の頃だったと思います。父が風邪をひいたものだから、私が代理で「モロモー」に出た時の思い出話から始めましょう。「モロモー」といっても、御存知ない方が多いでしょう。布袍、輪げさの上にマントを着て、浦山の町並みを一軒残らず挨拶して廻ると云う行事です。たしか一月四日だったと思います。

重助さんが「モロモー」と大声をあげて一軒宛、玄関の戸を開けます。私は、出て来られた御主人に「お目出度うございます」と新年の挨拶の言葉を述べます。ついて来た「トーマ」は、大きな袋の口を開けて、頂いた御仏供米を流し込みます。二十戸に一戸位の割合で内に入ってお仏壇の前で「我建超世願」を称える家があります。斯うしてまる一日かかって浦山中を廻るのですが、この「モロモー」が何を意味するのか判りません。先日、日本古典文学大系の中の狂言集を讀んでいて、次のような箇所がありました。

物中　案内中、武悪は内におりやるか。イヤ、表に聞きなれた声で物申とあるが、あれはたしかに太郎冠者が声でござる。

恐らく此の「物申」すなわち「モノモー」が「モロモー」と聞えたのでしょう。

兎に角、昔々の思い出話です。

現在の庫裡が再建されたのは昭和三十八年です。それ以前は、庫裡の大きな囲炉裏の横で年頭の御挨拶を受けたものです。小さな枝、大きな枝、丸太、そして大きな流木の根っ子と、様々な燃木が豪勢に燃え上がっている囲炉裏は、お正月の和やかな気分にマッチしていて酷寒の北国に居ることを一瞬忘れさせる暖かさでした。

当時は、未だ自家用車は無く、黒東の門徒衆は、雪道を権蔵橋を渡って歩いて年頭詣にいらっしゃいました。台所のもう一まわり大きな囲炉裏では、お燗番の世話役連中が詰めていて、お詣りの衆への年酒の接待に転手古舞でした

昔の善巧寺のお正月風景を一々数え上げていたら際限ありません。

姿、形は変っても、門徒と寺の交歓のよろこびには、脈々として変らないものがあります。今年も、御一緒に年頭の樽酒を酌み交わそうではありませんか。

住職　雪山　俊之

菊薫る 聞法の秋

善巧寺の歴史を刻んだ三日間

ああ聞法の秋—六年間 待ちに待った秋の大法要が菊薫る十一月三、四、五日、浦山・善巧寺において勤修されました。

大谷光照前門主猊下をはじめ、桐溪順忍勧学寮頭、山本仏骨伝道院長、利井興弘行信教校々長と、お出まし下さった先生方は、聞法の秋にふさわしい宗門最高の顔ぶれ。聴聞の座についたのべ二千人の門信徒に深い感銘を与えました。また、三日間にわたる華やかな庭儀、縁儀の大絵巻や、空華僧鎔展の一つ一つは私たちみんなの目に焼きつきました。

この希有のご勝縁は、末永く語り継がれ、善巧寺の歴史の一ページを飾ることでありましょう。

十一月三日

7・00 晨朝勤行 世話方集合

10・00 報恩講「正信念仏偈作法」講演、利井興弘師「凡夫直入」

14・00 落慶法要「無量寿経作法」導師 称名寺殿。法中十二名。楽人十一名。天童子十名、衲衆十名、婦人衆二十四名。表白に曰く「省れば 昭和五十一年秋、三大法要厳修の議纒るや、護法愛山の志あつく善巧寺の全門信徒一丸となり、日曜学校、婦人会、声明会等々の教化聞法の組織を結成するとともに、六年の歳月を閲して、今、本堂修復、庫裡、経蔵等の新改築の落慶を迎う、正しく千種の荘厳は成満し百般の資具は整備せられしなり、悦予心に充ち 踊躍身に余る……」講演、土井了宗師「明教院僧鎔師の生涯とその門弟」

19・00 初夜「正信偈」御伝鈔拝読。法話、利井興弘師

十一月四日

7・00 晨朝勤行 法話 利井師

10・00 報恩講 導師 住職 講演、山本仏骨師「これあるかな」

14・00 寺族門徒総法要「五会念仏作法」導師、連枝本行寺殿。法中十八名、楽人十一名。天童子十二名。婦人衆三十八名。衲衆二十名。講演、山本和上「能所不二」

19・00 明教院僧鎔を語る夕べ

桐溪和上、山本和上、利井、土井両講師の他、行信教校から宮崎清先生もお越しになり、加わえて僧鎔師の生家から渡辺俊夫さんもお見えになって、人、時、場所と三拍子そろった

ああ明教院僧鎔さま

ところで「帰三宝偈」「総序の御文」を利井明弘師の調声でおつとめ。つづいて、それぞれが、それぞれに、僧鎔師の遺徳を語り合いました。

なかでも、お世話方本波貫一さんの明教院イチョウの伝説には、学匠方も大よろこび。利井興弘師の若院ムコ入りと空華の法脈の一席には堂内爆笑。山本、桐溪和上の空華学派の味わいには、しみじみと心をうつものがありました。

そして最後は世話方田中まつえさんの覚えていた百五十回忌の記念の歌をみんなで合唱して、二百回忌の有難さをかみしめ合いました。

へ黒部の流れ水清き、月訪う里にあまねくも、庭の草木もかしこみぬ ああ 明教院僧鎔さま

寺ごよみ 二月

一日 お講 浦山
二日〜三日 三日市 報恩講
四日
八日〜九日 生地 報恩講
一六日 お講 下立 音沢御助成
一八日〜一九日 下立 報恩講
二二日 舟見 報恩講
二三日 入善 泊報恩講
二五日 栃屋 熊野報恩講

前門主猊下御親修 宗祖大遠忌

黄袈裟目にしむ空華二百回忌

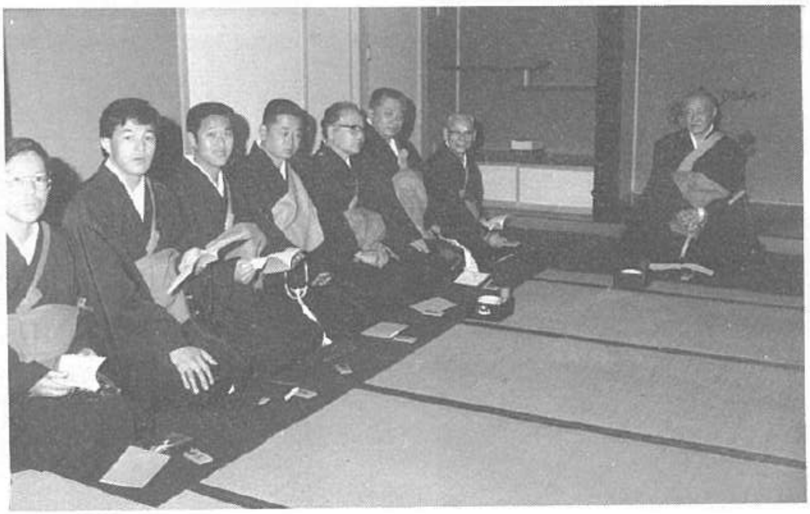
十一月五日

7・00 晨朝 法話、利井師「聞思して遅慮することなかれ」

10・00 空華忌 「仏説阿弥陀経」導師、行信教校々長。法中、桐渓和上以下、行信教校教授、OB他組内、親戚、門弟等三十六名。全員、黒衣、黄袈裟で出勤。

表白

敬って
西方の願王無量寿尊
忍土の教主釈迦善逝
観音勢至九品の聖衆
念仏伝来諸大師等
一切の三宝に白して言さく
慈に本日
空華学轍の祖 善巧寺第十一世
明教院釈僧鎔慶叟法師の
二百回忌を勤修す
それ惟れば
空華法師は享保八年
越中新川郡水橋の里に誕生され
齢十一歳にして上市・明光寺の
霊潭師につき、仏門に入る
二十一歳にて善巧寺の法嗣とな
りのち 学林にて僧樸師の門人と
なって宗学を極め
自坊に帰っては、空
華廬を設けて学僧を
教育、その門弟三千
に及ぶ。
「終日能行すれども
所行海をいでず」
「能所不二 圓融無导
法体大行」の味わい
は
正に空華尊者の発揮
せられるところなり。
天明三年の本日十一
月五日
六十一歳にて往生さ
れるまでの師の生涯
は、
自信教人信 大悲伝
普化の大道邁進の姿なり
ここに本日、空華一門相集まり
その遺訓をいただき、
大衆もろともに 小経一巻
声は高からず低からず
ねんごろに読誦して
讃仰の志を影前にささぐ
ねがわくは
三宝哀愍納受したまえ



読経終わって法中全員、影前において焼香。つづいて記念講演は「空華学轍の思想」と題して桐渓和上。「本堂に私の書いた空華の額をあげていただいて、うれしいかぎり」とよろこばれました。

13・00 達書伝達式。本山からの祝辞と記念品(仏旗)が平野輪番の手で授与されました。

13・30 帰敬式 島田久一氏、田中菊代さん他一二名、前門主様からおかみそりを受けました。

14・00 宗祖大遠忌御親修。

御導師 前門主猊下。結衆十四名、列衆二十名楽人十一名、天童子十二名、衿衆十八名、婦人衆十八名。雨天により縁儀。

正信念仏偈を前門様とご一緒に唱和したあと、ご法話をいただき「念仏の声を子や孫に伝えるために、一人一人が努力してくださるよう」とねんごろにご教諭下さいました。

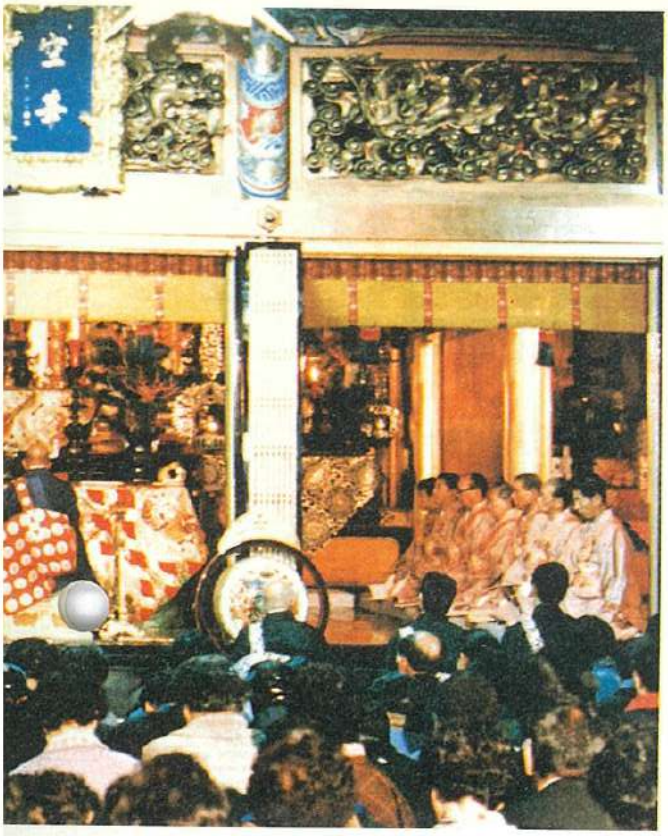
このあと、桐渓和上の心あたたまる記念講演があり「如来様は見てござる、聞いてござる、知ってござる親様です」とのおことばに涙するお同行もおられました。

16・30 前門様記念植樹

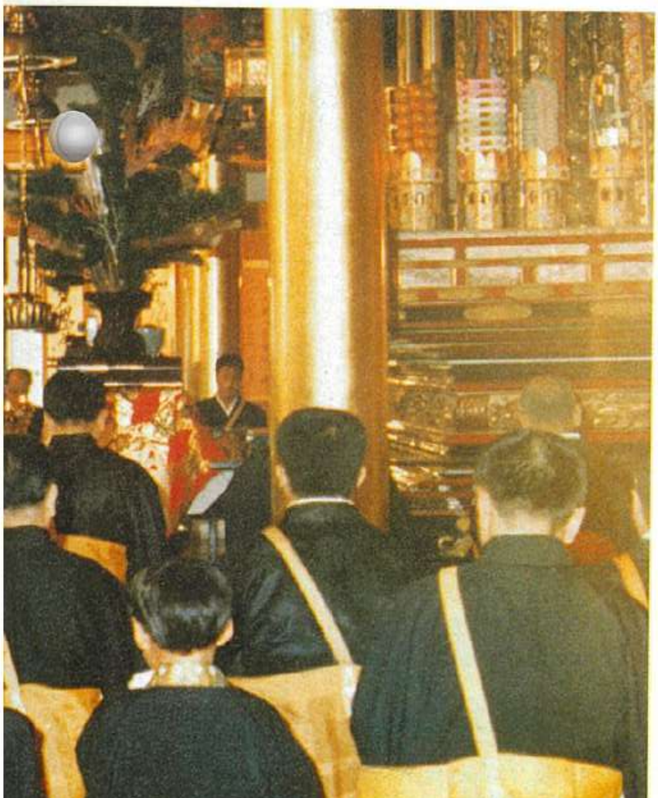
18・00 記念パーティ 宇奈月ニューオータニで前門主を囲み、僧俗ともどもに法要が有難く終了したことを喜び合い、雪ん子劇団のミュージカルを観劇しました。

—◇◇◇—

なお法要期間中開かれた空華僧鎔展は質量ともに充実、学僧、門信徒から感歎の声が聞かれました。



聞法の秋 57年11月3日4日5日



㊌花 空華僧鎔展

聞法の秋
前門様を囲む門信徒の集い

善巧寺門徒年忌一覧

【一周忌】浦崎博（母1・2）野村五郎（長女、2・5）佐々木照光（母、4・24）佐々木伊和保（祖母、5・6）開沢章一（5・15）舟屋幸春（6・4）根岸中（7・1）橋場仁作（長男、7・12）瀬川久作（7・18）野崎邦宏（8・10）本波吉男（長男、9・4）沢田正（母、9・19）島田雄二（9・25）佐々木経治（10・23）福沢栄作（11・5）開沢庄作（11・7）藤沢正雄（11・28）

【三回忌】川内治太郎（1・4）佐々木二作（1・18）朝倉孫石（妻、同）谷川正明（姉、同）大藪敬三（妻、3・6）開沢義輝（祖母、5・8）島田栄吉（5・26）丸田梅作（6・12）島田清一（同）栃沢重盛（母、6・17）田中静治（6・23）谷川忠三（6・27）佐々木藤松（母、7・20）山本九作（同）川口武（8・15）野崎正次（8・16）鬼原武義（9・9）浦滝義松（母、10・1）川瀬常次郎（10・16）佐々木隆（11・28）大藪良造（母、12・27）

【七回忌】大藪宇之助（1・16）大藪義悦（2・7）佐々木藤松（父、3・16）越後庄太郎（妻、3・17）丸田稲夫（3・27）鬼原辰雄（5・3）佐々木正雄（母、5・13）谷川正明（母、5・28）谷口浅五郎（6・13）野村篤司（母、7・1）橋松次（母、7・3）椚直次（7・19）谷口義松（妹、7・26）橋俊孝（祖母、7・28）島田正豊（母、8・4）中村幸作（8・9）岡田清二郎（母、8・13）沢田康平（9・12）橋弘（母、10・3）浦沢益次郎（10・15）浦滝善作（10・16）高松昭春（母、10・30）橋場豊治（11・7）新保孝夫（母、12・12）

東狐与四正（12・19）佐々木清太郎（12・25）

【十三回忌】本波秀三（母、1・13）谷川繁夫（母、2・3）佐々木盛二（2・6）中坂与一（母、2・28）開沢宗作（3・5）川内七之助（3・15）新保助次郎（3・22）丸田良作（孫、4・3）佐々木次郎助（妻、4・7）川内明男（長男、4・10）有馬国男（母、4・20）野村虎太（4・23）中村春雄（5・4）根岸俊治（6・28）山内賢二（母、7・4）大島清一（母、7・6）川内明男（妻、7・7）中村新四郎（母、同）佐々木宗太郎（孫、7・17）川内周作（8・14）佐々木八郎（妻、8・21）鬼原勇吉（8・24）板久雄（母、9・3）中坂幸作（9・4）沢田幸男（母、11・3）山本浅二郎（妻、11・12）東狐義之（長女、11・15）沢木金治（妻、11・30）佐々木勝信（母、12・13）

【十七回忌】橋場宇之（1・18）鬼原吉蔵（母、1・28）森岡栄作（1・31）松平伊次郎（2・11）大野長作（2・20）佐々木茂（3・1）根塚卯一（母、3・13）橋早二郎（3・19）岩上正朔（4・1）中村与四松（母、5・3）丸田忠正（5・9）佐々木直正（5・18）大島吉郎（同）谷川彦平（妻、8・12）鬼原吉蔵（8・16）高島石次郎（9・20）板川吉次郎（妻、9・23）田中静治（母、10・4）島田浅次郎（妻、10・10）岡田助次郎（10・17）野崎吉郎（母、10・21）西田由広（11・18）新保政一（母、12・2）鬼原六右ェ門（12・11）沢田長作（12・26）

【二十三回忌】大藪久次郎（1・1）新保慶樹（1・11）川瀬義雄（長男、1・22）西中与次郎（1・27）板川行広（妻、1・28）川内善作（母、4・3）川内武次郎（娘、同）開沢長平（4・9）橋本用次郎（4・14）清水はな（母、4・24）佐々木重助（5・11）岩上吉十郎（5・13）樽井与四郎（5・19）中坂久次郎（5・30）川瀬武雄（母、7・1）佐々木作盛（子、7・6）佐々木虎次郎（母、7・10）野崎重次郎（7・29）沢田修（二男、8・22）板宗信（10・16）根塚幸作（母、11・16）野畑政治（12・13）根塚豊春（祖母、12・21）

【二十七回忌】野崎吉左ェ門（2・1）板倉正一（2・9）佐々木文作（2・16）中村新四郎（孫、3・10）森岡昭二（長女、4・4）浦滝忠次郎（妻、4・8）藤沢義雄（妹、4・14）川内次郎七（母、5・8）佐々木文一（妻、5・12）佐々木助七（5・16）佐々木寛（母、5・26）河村鉄造（長女、5・30）浦滝吟次郎（6・2）谷川石次郎（6・12）沢田幸平（6・21）川瀬良平（6・26）飛弾芳信（母、7・3）鬼原亀次郎（同）佐々木直正（7・4）佐々木甚之助（妻、8・11）浦滝甚一（父、8・21）丸田梅次郎（妻、9・9）山本清吉（9・10）川内善七（9・15）浦滝善造（二男、9・27）島田春次郎（11・3）川口福次郎（11・6）長沢義雄（母、11・18）開沢良造（12・5）谷川和十郎（娘、12・11）川内栄作（12・12）板川徳次郎（妻、12・17）浦山幸作（12・31）

【三十三回忌】橋清治（三男、1・9）佐々木舟義（1・14）藤沢義治（1・27）山本清吉（妻、2・7）西中力次郎（二男、2・8）佐々木舟義（二男、2・9）佐々木時雄（二男、2・13）谷口太郎平（二男、2・23）福沢紋平（妻、2・25）板川啓治（3・1）大島己之助（3・2）川内千右ェ門（祖母、同）大浦憲次郎（3・4）佐々木定一（3・5）谷口健次郎（二男、4・1）開沢庄造（母、4・2）大浦和左ェ門（父、4・12）岡田岩次郎（4・20）丸田稲夫（長男、5・2）佐々木光治（二男、5・9）川内勘右ェ門（5・15）上坂林太郎（妻、6・25）沢田貞次郎（同）大藪六右ェ門（孫、7・6）浦田甚作（母、7・16）中村久作（父、同）有馬猪次郎（六女、7・20）鬼原勇作（二男、7・25）佐々木平太郎（7・31）佐々木仁吉（母、8・13）佐々木貞次郎（9・4）浦滝鉄太郎（妻、9・22）佐々木甚八（妻、10・10）佐々木伊四次郎（三男、10・16）佐々木貞治（長男、10・21）東狐政次郎（11・24）谷口義一（二男、11・27）佐藤宗作（長女、12・26）野崎金造（長女、12・26）板谷正一（孫、12・29）

【五十回忌】佐々木芳次郎（孫、1・11）野島又四郎（孫、2・1）鬼原米作（祖母、2・8）川口藤次（三女、2・13）大野宗右ェ門（2・18）山根竹次郎（2・18）山本仙太郎（2・22）朝倉九平（孫、2・23）佐々木九郎七（3・2）野崎与五郎（母、3・10）野崎義堯（4・9）菊地孝太郎（4・20）川瀬清作（妻、5・3）開沢良平（三男、5・21）佐々木岩雄（6・1）中村伝七（母、6・28）中村嘉太郎（妹、7・9）谷口力次郎（7・12）本波貫一（長男、7・17）福沢五郎助（妻、7・20）森助七（母、8・11）佐々木小右ェ門（母、8・16）野畑孫作（母、8・21）岡田与次郎（四男、8・24）根岸元吉（二男、9・3）上坂林太郎（9・7）佐々木助三郎（妻、9・23）佐々木米松（母、9・30）佐々木次郎兵ェ（9・30）川内宇之次郎（10・6）西中与四（母、10・22）沢田健二（五男、11・14）佐々木竹次郎（養子、11・24）藤沢常次郎（父、12・10）丸田清造（妻、12・13）橋場平次郎（12・13）佐々木甚右ェ門（12・14）清水小太郎（三女、12・23）佐々木新四郎（妻、12・24）島田方員（12・29）

【百回忌】沢木庄八（女、1・31）佐々木茂左衛門（妻、2・17）開沢伝左ェ門（2・28）鬼原嘉右ェ門（3・29）橋本彦十郎（母、4・10）山本彦三郎（三女、4・22）福沢五郎三郎（妻、5・15）佐々木十兵ェ（二男、5・19）鬼原孫兵ェ（5・29）清水小三郎（妻、6・5）山根清右ェ門（二男6・10）栃沢六右ェ門（6・18）佐々木次郎八（四男、6・19）丸田孫左ェ門（孫、6・24）島田九左ェ門（8・12）橘忠右ェ門（8・13）谷口新左ェ門（母、8・20）谷川和平（8・26）中村新四郎（母、8・30）佐々木金三郎（女、9・1）沢田幸右ェ門（9・20）中村重助（9・28）朝倉孫右ェ門（長男、10・3）佐々木甚平（四男、10・14）板宗三郎（妻、10・19）板仁兵ェ（妻、10・28）佐々木源兵ェ（母、10・29）佐々木宗三郎（母、11・2）根塚助左ェ門（母、11・18）野畑孫七（母、11・18）大島小三郎（妻、11・26）佐々木与三左ェ門（12・9）中林市郎右ェ門（妹、12・12）丸田六右ェ門（妻、12・20）

勧学溪で二百回忌

両門様へお礼言上

秋の法要の興奮さめやらぬ十一月九日、門信徒有志二十五名で、両門様へお礼言上の旅に出ました。

まず一番に明教院様の生家、渡辺さん宅へ伺い、仏前でおつとめをさせていただきました。この渡辺さんが旅行社に勤めていらっしゃって今回の旅はすべて渡辺さんのお世話というご縁の深さです。

このあと上市、明光寺へお参り、同寺の土井先生には今度の法要では、講師として、空華僧鎔展の監修者としてひとかたならぬお世話になりました。ちょうど報恩講の最中でしたが、本堂でおつとめをさせていただき、心からお礼を申しあげたことであります。

さて、このあとはハイウエーをひた走り、午後三時にはご本山へ。

百華園にある瞰池亭という、素晴しい小庵で、ご門主様が親しくお会い下さり、茶菓の接待までいただいて一同、大感激。

このあと、大谷本廟で前門様とお会して、今度の法要のお礼を申し上げ、そのまま、勧学溪へ出向いて、明教院様の墓前で、全員が読経、焼香して二百回忌の感慨を新たにしました。

なお、両門様と参拝部には富山米一俵ずつをおみやげに届けさせていただきました。

お礼言上の旅はここで大役を果たし、この夜は嵐山で一泊、なごやかに昼間の肩こりをほぐさせていただきました。

住職日記

十二月十日　終日曇り。大銀杏樹は、枝に一枚の葉も残していない。境内一杯に散り敷かれていた夥しい落葉も、昨日午前、午後に亘る二人の御世話方の勤労奉仕のお蔭ですっかり取り除かれ、先日の降雪の際の残雪が、本堂の軒下に僅かに残っている。

九時の特急で富山へ。公会堂別館は五階。エレベータを出ると恰度定刻十分前。富山市民大学閉講式である。市民大学も今年度で五回目に当り、縁あって第一回目から講師をしている。本年度の講題は「人間学」。講師たちも二十名ばかり、受講者は男女老若二百名ほど参加している。色々な知人に会える楽しみがある。黒坂氏に久しぶりに遭う。昭和十年頃浦山小学校で学童が歌っていた唱歌、「明教院さま」の作曲者である。不明だった作詞者が判明する。お名前は、新村　作氏。学校の校長を歴任なさった方で、現在三日市在住。昭和三十年頃、善巧寺で毎月一回催されていた東山句会の常連メンバーの一人で、俳号は寫空。近日、御会いして詳細を伺い度い。式終了後「国際化時代の日本」と題する吉田健三氏の特別講演を聞く。講師は、元中国大使で、流石、現場の体験を土台にした中国の現情分析には、どっしりとした重みが感ぜられる。

終わって総曲輪通りで昼食の後、本屋に寄って時間を潰す。新刊本の氾濫、恐るべきものあり。

三時半別院。輪番から先日の法要の際のスナップ写真数葉を頂く。

秋の叙勲に際し、富山教区にて受彰された方々の祝賀会に参列。受彰者の一人善称寺住職は、従兄弟に当る。四十年にわたり保護司の役に当られた勲功による受彰である。

参加者約百名。此処でも久しぶりに顔を合わせる懐かしいメンバーが何名もいる。

本堂にて読経の後、大食堂にて祝賀会。三人の受彰者の挨拶が夫々にいい。勲章を貰うとか、思ってもいないことだったとむしろ恐縮している表情で、永年の蔭の努力の一端を紹介して下さる。発起人の組長代表、保護司代表、教誨師代表、保育連盟代表が夫々に祝辞を述べ、女職員の花束贈呈、乾杯の音頭と例の如く進行する。

富山発十八時二十分の急行にて帰院。入浴、就床九時。

起重機の一つ　ポツンと枯野哉

バス待ちの　客二、三人冬の街

寺ごよみ　三月

一日　お講　浦山

二日・十日　浦山・報恩講

一三日　太子会　聖徳太子様のご法事を寺でおつとめいたします。建設関係者だけでなく、一般の方もどうぞお参り下さいますように

一六日　お講　栃沢

二〇日　三法要実行委員会

二六日　雪ん子劇団春の公演

両門様迎えた希有の勝縁

四月二十九日、十一月五日 法要記念日に

三法要実行委員会は十二月十六日、第二十四回の会合を開き、法要が無事終了したことをよろこび合うとともに、今後の教化活動等について話し合いました。

その結果、三法要を記念して五十二年一月一日に第一号が発行された「寺報・善巧」の継続を確認した他、本堂裏に空華僧鎔展を常設すること。さらに四月二十九日の「慶びの春」と、十一月五日の「空華忌」を寺の記念日とすることを決めました。

これによって、寺の教化活動は今後も活発に行われる他、春、秋二度の法要記念日には教化伝道の行事がこれからも催されることになりました。

善巧寺の常例行事

お講	毎月	一日・十六日
日曜学校	毎月	第四日曜日
雪ん子劇団	毎週	月曜 四時
壮年会	毎月	第二土曜日
婦人会	毎月	第一月曜日
お経の会		第一・第三土曜日

空華の学匠も感激 各方面からお礼の言葉

「謹啓、今度空華忌に参上いたしまして、大変お世話になりました。でもほんとうに盛会で、有難いことだと存じました。皆様さぞかしお疲れのことと思いますが、くれぐれもお用心遊ばして下さい誠に有難う御座いました」

―宇治市五ヶ庄、桐渓順忍和上より

「拝啓、過日来は初めて参上し、明教院和上の碑前に拝礼がかない有難く存じました。その節は種々御手篤い御世話になり、深く御礼申し上げます。…寒さも募ってまいります。御寺内皆様何卒御自愛なすって、斯道の興隆にご精進のほどを。」

―大阪市豊里　山本仏骨師より

「春は花に心奪われ、秋はただただ感涙の三日間。ようこそ勤めて下さったことだと、よろこんでおります。」

―大阪・高槻　利井興弘師より

本山、別院、その他法中の方々からもていねいなお便りをいただき、そのどれもが、このたびの春秋・両門様をお迎えした希有の勝縁の盛会をよろこんで下さるものばかりでした。本当にうれしいかぎりであります。

ご寄進

☆**ご本尊御戸帖　栃沢の開沢信一さん。**大正時代から懸けていた戸帖を、法要記念に新調させていただきました。表紙カラーの中央上の写真がそれです。

☆**式幕　三法要実行委員会**　寺の入り口の車庫兼受付の大式幕を委員会有志の皆さんがご寄進下さいました。

☆**僧鎔師書簡　中陳の大野弘恵さん**　空華僧鎔展に出品して下さった明教院様の真筆書簡（写真）を二百回忌記念にと。

いろいろ有難うございました。

法要写真展

秋の法要の写真を五百余枚、本堂後門ギャラリーに展示してあります。ご覧下さい。撮影は宇奈月写真クラブ「写楽」の野畑博さん。

聞法の秋全録音

テープとビデオで法要を記録しました。ビデオは三時間、講演のテープは全五巻、十時間あります。会合や、ご家族で、ご希望の方には貸し出しいたします。ご利用下さい。

合掌

「六年前に三法要をつとめると聞いたときは、居られるかなあと思っていましたが…」

「チューリップ、菊の花、うまく咲くかと心配でしたが、ちょうど間に合って…きれいでした。本当に花と咲きましたね―。」

「両門様をお迎えしての法事、私の人生最大の思い出です。」

「先日ある合合にいったら、善巧寺の門徒さんじゃない方でしたが最初のあいさつが、おい、あんた、すばらしい法事されましたね―。おたくの寺すごいね。いや、それより、門徒の人たちの心意気がすばらしかったね、感心しましたよということでした。うれしかったです。」

「実行委員会ではじめて仕事をさせていただいたが、寺には、なんというか、理屈でいえないなにかがあると思いました。」

十二月十六日、二十四回目の実行委員会でうかがった。お世話方の感想の一部です。ようこそ。